

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 19 日現在

機関番号：27601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530642

研究課題名(和文)1950年代の雑誌における文化人による言説生産とその受容に関する歴史社会学的研究

研究課題名(英文)A study on making discourse by the intellectual on the magazine and its receiving in the 1950's from a viewpoint of historical sociology

研究代表者

阪本 博志(SAKAMOTO, HIROSHI)

宮崎公立大学・人文学部・准教授

研究者番号：10438319

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主要な成果は、次の二点である。第一に、1950年代から1960年代の日本社会における重要な文化人のひとりである、大宅壮一が1950年代の百万部雑誌『週刊朝日』におこなっていた言説生産の様相を明らかにし、これを近現代メディア史に位置づけた。第二に、『週刊朝日』と読者の関係性について、同時代の百万部雑誌『平凡』『サンデー毎日』との比較も含めて考察し、近現代日本社会に位置づけた。

研究成果の概要(英文)：The main results of this research are the following two points. Firstly, I have clarified the aspect of Soichi Oya's, who was one of the important intellectuals in Japanese society in the 1950's and 1960's, making discourse on "Weekly Asahi" issued more than one million parts in the 1950's. And I have positioned it in the modern media history. Secondly, I have considered the relationship between "Weekly Asahi" and its readers, comparing with "Heibon," "Sunday Mainichi", which were both one million parts magazines of the same age. And I have positioned it in the modern and contemporary Japanese society.

研究分野：社会学

キーワード：大宅壮一 『週刊朝日』 1950年代 総力戦 大衆社会化 歴史社会学 メディア史 ライフヒストリ

1. 研究開始当初の背景

応募者は、1953年に百万部を突破した1950年代を代表する大衆娯楽雑誌『平凡』の研究に取り組み、それをまとめた拙著『『平凡』の時代 1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』(昭和堂)を2008年5月に上梓した。このなかでは、『平凡』を軸としてラジオ・映画・テレビにおいて展開された大衆文化のさまざまな企画を再構成した。それとともに、雑誌の「送り手」「受け手」へのインタビュー調査から、それぞれの様相を明らかにした。その上でこれらを戦後社会に位置づけた。

この1950年代『平凡』研究に携わるなかで、メディア史的観点から大宅壮一(1900-1970)に着眼するに至った。『平凡』はテレビが本格的に普及する直前のラジオ・映画が主要なマスメディアであった1950年代に、この両メディアと結びつくことによって大衆の支持を集めた雑誌である。一方1950年代半ばから1960年代半ば、週刊誌・新書に代表される「中間文化」(加藤秀俊)の興隆や民間ラジオ放送の開始・テレビの普及を背景に評論家として最盛期を迎えたのが大宅である。大宅は、新聞・雑誌・ラジオ・テレビを舞台として活躍する「マスコミ四冠王」と言われ、「マスコミの帝王」の呼び名をほしいままにした。これらから、『平凡』と大宅にはメディア史的連続性が見出される。

以上から応募者は拙著の刊行と前後して、大宅のライフヒストリーに学術的検討を加えた初の論考「大宅壮一研究序説 戦間期と昭和30年代との連続性/非連続性」を『文学』2008年3・4月号に発表した。

2011年3月には、占領期の大宅について、これまで間違った通説が信じられてきたがゆえに研究が空白となっていたことを指摘し、通説の誤りを明らかにし当時の大宅の著作物に考察を加えた拙論「占領期の大宅壮一「大宅壮一」と「猿取哲」」(『Intelligence』第11号)を発表した。続いて、戦後本格的に活動を再開する1950年前後の大宅の活動について論文「大宅壮一の「再登場」 1950年刊行の『日本の遺書』『人間裸像』に着眼して」(『出版研究』第42号、2012年)を発表した。

これらのほか、上記の『平凡』研究を踏まえ、六〇年安保時の『世界』と『平凡』との比較を行った拙稿『『平凡友の会』と六〇年安保 電子出版元年・安保闘争50周年の年に『平凡』と『世界』を通して考えること』(『d/SIGN』第18号、2010年)を発表するなど、雑誌メディアの観点からの1950年代における大衆社会化状況の検討を進めた。

2. 研究の目的

本研究は、1950年代の雑誌における文化人

による言説の生産とその受容について、歴史社会的考察を加えるものである。「文化人」のなかでも、重要なオピニオンリーダーのひとりであった上記大宅に着眼する。そして1950年代の雑誌のなかでも、1954年に百万部を突破するとともに、1950年代において大宅が長期にわたり連載を持っていた『週刊朝日』に焦点を当てる。同誌における彼の言説生産の様相を明らかにし、転向や総力戦時の戦争体験も含めた彼のライフヒストリーを検討する。また、同時代の百万部雑誌『平凡』『サンデー毎日』との比較も含めて、『週刊朝日』と読者との関係性について、近現代日本のなかに位置づける。

3. 研究の方法

文献調査とインタビュー調査をおこなった。前者は、国立国会図書館や公益財団法人大宅壮一文庫をはじめとする図書館において従事した。そのほか大宅の母校・大阪府立茨木高等学校(旧制大阪府立茨木中学校)でも調査をおこなった。後者は、生前の大宅を知る人たちに対して実施したほか、週刊誌に関する先駆的研究である『週刊誌 その新しい知識形態』(三一書房、1958年)を著した週刊誌研究会のメンバーに対してもおこなった。

4. 研究成果

(1) 学界への研究成果の発信

大宅壮一のライフヒストリーと1950年代の雑誌における言説生産について

2012年6月に開かれた日本マス・コミュニケーション学会春季研究発表会において「占領期のメディアと文化人 大宅壮一の活動をめぐって」と題したワークショップを、同学会メディア史研究部会において企画した。このなかで問題提起者として、表題のテーマの報告をおこなった。これは大宅が「マスコミの帝王」と呼ばれる1955年以降の歴史的意義付けを踏まえその占領期の活動に考察を加えたものである。

このあと2012年9月に刊行された吉田則昭・岡田章子編『雑誌メディアの文化史 変貌する戦後パラダイム』(森話社)において、「1950年代『週刊朝日』と大宅壮一連載「群像断裁」をめぐって」を発表した。これは1950年にジャーナリズムに本格的な復帰を遂げた大宅の『週刊朝日』における言説生産の様相を明らかにし、その言説にあらたな角度から光を当てるとともに、当時の大宅を近現代メディア史に位置づけたものである。

以上の大宅研究の成果を踏まえ、大宅の総力戦下における映画工作と1950年代の活動との把握を試み、「大宅壮一の戦中と戦後

ジャワ文化部隊と「無思想人」宣言」と題した学会発表を、2014年11月に日本出版学会にておこなった。この内容に加筆した拙稿「大宅壮一の戦中と戦後 ジャワ派遣軍宣伝班から「亡命知識人論」「無思想人」宣言」へが、2015年刊行の『現代風俗学研究』第16号に掲載される予定である。

これらのほか、大宅のライフヒストリーを明らかにしていくべく、彼のパーソナリティーの形成において重要である旧制中学時代の資料の紹介を、拙稿「中学生時代の 大宅壮一 時事新報社発行の雑誌『少年』への投稿活動と学業成績」(『大衆文化』第10号、2014年)「旧制茨木中学校における1920年のストライキと大宅壮一」(『大衆文化』第12号、2015年)でおこなった。

そして、大宅のライフヒストリーについてこれまでまとめていた拙論に、新たな知見を加えて改稿を施した。これは、ミネルヴァ書房より2015年刊行予定の土屋礼子・井川充雄編『近代日本メディア人物誌 ジャーナリスト編』に収録される。

1950年代の雑誌と読者について

上記『週刊朝日』について2012年11月に開かれた日本社会学会大会において「1950年代『週刊朝日』の読者参加企画に関する社会的考察」と題した発表をおこなった。さらに2013年3月には、『週刊朝日』『サンデー毎日』『平凡』という1950年代の百万部雑誌における雑誌と読者に関する関係について、“Readers’ Contributions to Million-selling Magazines in Japan in the 1950s”と題した発表を香港大学でおこなった。そして、1950年代の大衆社会と雑誌ジャーナリズムに関して、「大衆社会とメディアとの関係についての日韓比較研究に向けて1950年代日本の百万部雑誌『平凡』『週刊朝日』の事例から」と題した口頭発表を、2014年8月に開かれた日韓シンポジウム(日本マス・コミュニケーション学会と韓国言論学会との共催)においておこなった。

そのあと、近現代日本における1920年代と1950年代の2度にわたる大衆社会化を視野に入れたうえで1950年代の大衆社会化状況下の『週刊朝日』と読者との関係性を論じた拙論「近現代日本の大衆社会化と活字メディアの読者参加企画 1950年代『週刊朝日』の「表紙コンクール」「文化講演会」を中心に」をまとめた。これは、2015年に森話社より刊行予定の谷川建司・須藤遙子・王向華編『クリエイティブ産業のポリティクス』に収録される。

以上、大宅に関する先行研究も少なく、また百万部雑誌である1950年代『週刊朝日』を今日の時点から歴史社会的にとらえた研究もとばしいなかで、1950年代の百万部雑誌における大宅の言説生産の様相ならびに、百万部雑誌と読者との関係性を、近現代日本

のなかに位置づけた。

(2) 社会への研究成果の発信

研究成果の社会への発信としては、研究で得た知見を踏まえた拙稿を、『東京人』2013年7月号、『週刊読書人』2013年11月22日号、公益財団法人大宅壮一文庫の会員向け機関紙『大宅文庫ニュース』第84号(2015年1月)に寄稿した。なお『週刊読書人』には関連文献の書評を2度寄稿した。

地域への発信としては、2013年7月20日に宮崎観光ホテルで開催された京都大学経済学部同窓会九州南部支部の総会において講話をおこなった。2014年7月8日に宮崎県立図書館で開かれた「宮崎県高等学校教育研究会図書館部会中部支部平成26年度生徒図書委員講習会」において講話をおこない、約70名の高校生に、研究成果の一部をわかりやすく伝えた。

また、2013年1月12日・26日、2014年2月1日、2015年2月21日に、自主講座(受講料無料の市民講座)を宮崎公立大学においておこない、研究成果の一部を一般市民にわかりやすく伝えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

阪本博志「大宅壮一の戦中と戦後 ジャワ派遣軍宣伝班から「亡命知識人論」「無思想人」宣言」へ」単著、『現代風俗学研究』第16号、現代風俗研究会東京の会、2015年掲載予定、査読有

阪本博志「旧制茨木中学校における1920年のストライキと大宅壮一」単著、『大衆文化』第12号、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター、61-82頁、2015年3月、査読無

阪本博志「中学生時代の 大宅壮一 時事新報社発行の雑誌『少年』への投稿活動と学業成績」単著、『大衆文化』第10号、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター、44-59頁(口絵においても資料を紹介)、2014年3月、査読無

〔学会発表等〕(計 7件)

阪本博志「大宅壮一の戦中と戦後 ジャワ文化部隊と「無思想人」宣言」単著、日本出版学会(於関西学院大学)2014年11月29日

阪本博志「大衆社会とメディアとの関係についての日韓比較研究に向けて 1950年

代日本の百万部雑誌『平凡』『週刊朝日』の事例から」単著、日本マス・コミュニケーション学会韓国言論学会主催第20回韓国国際シンポジウム「日韓共同研究の可能性を探る グローバル時代におけるメディア研究」(於早稲田大学) 2014年8月23日

阪本博志「大宅壮一の性的言説に関する考察 大宅壮一のパーソナルヒストリーとメディアヒストリー」単著、早稲田大学20世紀メディア研究所第80回研究会(於早稲田大学) 2013年12月7日

阪本博志「晩年の大宅壮一 その猥談に着眼して」単著、社団法人現代風俗研究会例会(於徳正寺) 2013年6月1日

Hiroshi Sakamoto "Readers' Contributions to Million-selling Magazines in Japan in the 1950s" 'Politics of Creative Industries: Critical Reflection' A conference organized by Global Creative Industries Programme School of Modern Languages and Cultures The University of Hong Kong, (於香港大学) 2013年3月24日

阪本博志「1950年代『週刊朝日』の読者参加企画に関する社会学的考察」単著、日本社会学会(於札幌学院大学) 2012年11月3日

阪本博志「占領期のメディアと文化人 大宅壮一の活動をめぐって」単著、日本マス・コミュニケーション学会春季研究発表会ワークショップ(於宮崎公立大学) 2012年6月3日

〔図書〕(計 4件)

阪本博志「大宅壮一」単著、土屋礼子・井川充雄編『近代日本メディア人物誌 ジャーナリスト編』ミネルヴァ書房、2015年刊行予定

阪本博志「近現代日本の大衆社会化と活字メディアの読者参加企画 1950年代『週刊朝日』の「表紙コンクール」「文化講演会」を中心に」単著、谷川建司・須藤遙子・王向華編『クリエイティブ産業のポリティクス』森話社、2015年刊行予定

阪本博志「評論と猥談 大宅壮一をめぐって」単著、井上章一編『性欲の研究 エロティック・アジア』、平凡社、169-174頁、2013年5月

阪本博志「1950年代『週刊朝日』と大宅壮一 連載「群像断裁」をめぐって」単著、吉田則昭・岡田章子編『雑誌メディアの

文化史 変貌する戦後パラダイム』森話社、69-100頁、2012年9月

〔その他〕

新聞・雑誌等への寄稿(計 8件)

阪本博志「大宅壮一の戦中と戦後 ジャワ文化部隊と「無思想人」宣言」単著、『日本出版学会会報』第139号、日本出版学会、14-16頁、2015年2月
<http://www.shuppan.jp/shukihappyo/652-201411.html>

阪本博志「書評 酒井順子著『オリーブの罌』」単著、『週刊読書人』2015年1月30日号6面

阪本博志「『茨木中学校生徒日誌』と大宅壮一の生涯」単著、『大宅文庫ニュース』第84号、公益財団法人大宅壮一文庫、2-3頁、2015年1月

阪本博志「推薦のことば 総力戦体制から週刊誌ブームへ」単著、『月刊読売』復刻版パンフレット、三人社、2014年5月
<http://3ninsha.blog.fc2.com/img/yomi3.jpg/>

阪本博志「茨木中学校時代の大宅壮一の成績」単著、『週刊読書人』2013年11月22日号8面

阪本博志「書評 塩澤幸登著『雑誌の王様 評伝・清水達夫と平凡出版とマガジンハウス』」単著、『週刊読書人』2013年10月11日号7面

阪本博志「それぞれの1950年代」単著、『東京人』2013年7月号、都市出版、11頁
<http://www.miyazaki-mu.ac.jp/info/20130705/201307tokyojinP11.pdf>

阪本博志「第18回橋本峰雄賞発表 阪本博志『「平凡」の時代 1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』受賞のことば」単著、社団法人現代風俗研究会編『現代風俗』第33号、新宿書房、179頁、2012年12月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阪本 博志 (SAKAMOTO, Hiroshi)
宮崎公立大学・人文学部・准教授
研究者番号：10438319